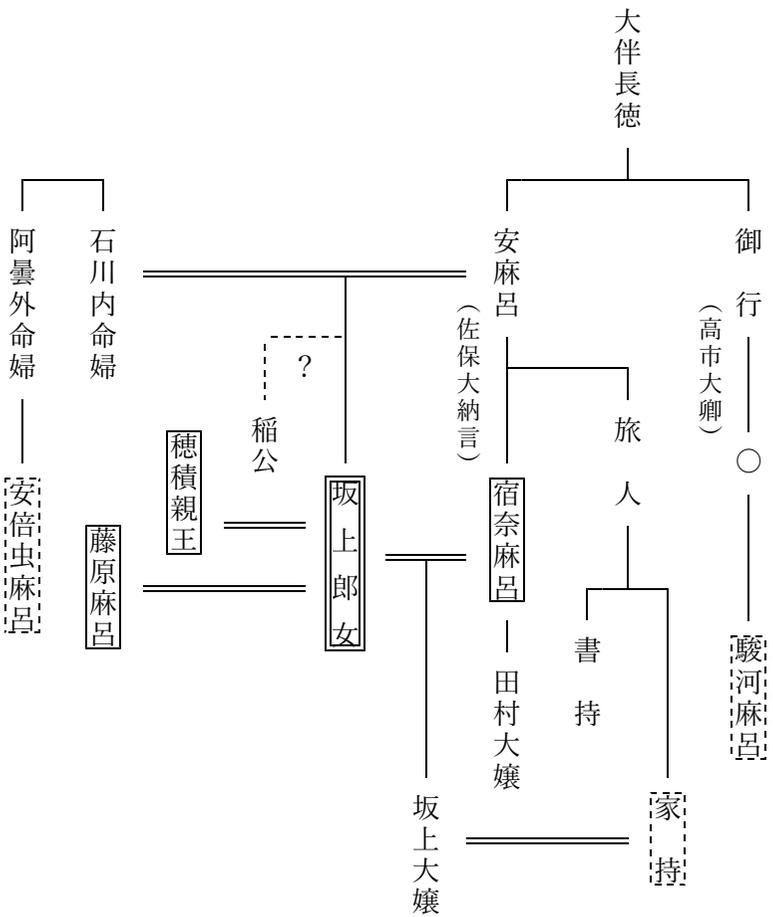


大伴坂上郎女と笠女郎を中心に

北川和秀



① 右、郎女は、佐保大納言卿の女そ。初め一品穂積皇子に嫁ぎ、寵びをうくること儔なし。皇子薨りましし後、藤原麻呂大夫この郎女を娉ふ。郎女は、坂上の里に家む。よりて族氏号けて坂上郎女といふ。(四・五二八左注)

② 右、田村大嬢と坂上大嬢と、并に右大弁宿奈麻呂卿の女そ。卿、田村の里に居む。号を田村大嬢と曰ふ。但し、妹坂上大嬢は、母、坂上の里に居む、仍りて坂上大嬢と曰ふ。時に姉妹諮問ひに、歌を以ちて贈答す。(四・七五九左注)

③ 右、坂上郎女は、佐保大納言卿の女そ。駿河麻呂は、この高市大卿の孫そ。両卿は兄弟の家、女孫姑姪の族そ。ここを以ちて、歌を題し送り答へ、起居を相問ふ。(四・六四九左注)

④ 右、大伴坂上郎女の母石川内命婦と、安倍朝臣虫満の母安曇外命婦とは、同居の姉妹、同気の親そ。これによりて郎女と虫満と、相見ること疎からず、相談ふこと既に密なり。聊か戯れの歌を作りて問答をなすそ。(四・六六七左注)

七〇六	七〇五	七〇四	七〇三	七〇二	七〇一	七〇〇	六九九	六九八	六九七	六九六	六九五	西曆
慶雲											年号	
三二元											持統	
三二元											文武	
三二元											先皇	
三二元											執政	
石上麻呂											事項	
御主人												
阿倍												
多治比												
島												
大寶令施行												



七五五	七五六	七五七	七五八	七五九
天平元 八七 宝字二 三				
淳仁				
孝謙				
藤原 仲麻呂	仲麻呂	仲麻呂	仲麻呂	仲麻呂
家持、 諭族歌	家持、 山菅の歌。	家持、 因幡守	家持、 因幡守	家持、 因幡守
橘奈良麻呂の 変				
万葉集 最終歌				

【大伴坂上郎女】

京職藤原大夫、大伴郎女に贈る歌三首 卿、諱を麻呂と曰ふそ (そのうちの一首)

① むしぶすま柔やが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも (四・五二四)

大伴郎女の和ふる歌四首 (そのうちの二首)

② 千鳥鳴く佐保の河瀬のさざれ波止む時も無しわが恋ふらくは (五二六)

③ 来むと言ふも来ぬ時あるを来じと言ふを来むとは待たじ来じと言ふものを (五二七)

大伴坂上郎女の歌二首 (そのうちの一首)

④ ひさかたの天の露霜おきにけり家なる人も待ち恋ひぬらむ (四・六五一)

大伴坂上郎女の歌六首 (そのうちの一首)

⑤ 恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言尽してよ長くと思はば (六六一)

大伴坂上郎女の歌七首 (そのうちの一首)

⑥ 青山を横切る雲の著ろくわれと咲まして人に知らゆな (六八八)

大伴坂上郎女の歌一首

⑦ 夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものそ (八・一五〇〇) 夏相聞

大伴坂上郎女の、姪家持の佐保より西の宅に還るに与ふる歌一首

⑧ わが背子が着る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ家に至るまで (六・九七九)

同じ坂上郎女の初月の歌一首

⑨ 月立ちてただ三日月の眉根搔き日長く恋ひし君に逢へるかも (六・九九三)

大伴宿祢家持の初月の歌一首

⑩ 振仰けて若月見れば一目見し人の眉引思ほゆるかも (九九四)

大伴坂上郎女の月の歌三首（そのうちの一首）

⑪ぬばたまの夜霧の立ちておぼほしく照れる月夜の見れば悲しき（六・九八二）

大伴坂上郎女の、元興寺の里を詠ふ歌一首（天平五年）

⑫故郷の飛鳥はあれどあをによし平城の明日香を見らくし好しも（六・九九二）

大伴坂上郎女の歌一首

⑬酒坏に梅の花浮け思ふどち飲みての後は散りぬともよし（八・一六五六）冬相聞

*青柳梅との花を折り挿頭し飲みての後は散りぬともよし（梅花宴の折の笠沙弥の歌）

【光明皇后】

藤皇后の天皇に奉る御歌一首

○わが背子と二人見ませば幾許かこの降る雪の嬉しからまし（八・一六五八）

【笠女郎】（天平一ケタの後半か）

笠女郎、大伴宿祢家持に贈る歌三首（そのうちの一首）

①陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを（三・三九六）

笠女郎、大伴宿祢家持に贈る歌廿四首（そのうちの八首）

②あらたまの年の経ぬれば今しはと勤よわが背子わが名告らすな（五九〇）

③君に恋ひ甚も術なみ奈良山の小松が下に立ち嘆くかも（五九三）

④わが命の全けむかぎり忘れめやいや日に異には思ひ益すとも（五九五）

⑤八百日行く浜の沙もわが恋にあに益らじか沖つ島守（五九六）

⑥朝霧のおぼに相見し人ゆゑに命死ぬべく恋ひわたるかも（五九九）

⑦思ふにし死するものにあらませば千たびそわれは死に返らまし（六〇三）

⑧皆人を寝よとの鐘は打つなれど君をし思へば寝ねかてぬかも（六〇七）

⑨相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額つくごとし（六〇八）